

# 花川病院 / 薬剤科(薬剤師)

室内 友希(薬剤師)

功 績	ポリファーマシー(多剤服用)に対して医師と細やかに連携し、加えて薬局内の環境整備を行うことで薬剤総合評価調整加算/薬剤調整加算の算定件数を大きく増加させた功績。
推 薦 者	薬局長 長谷川 裕之)
推 薦 理 由	ポリファーマシーの問題に対して粘り強く取り組み、医師・薬剤師のポリファーマシーに対する意識向上に繋げたことを評価し理事長賞に推薦します。

## 内 容

---

高齢者では、基礎疾患に対する治療薬に加えて様々な症状を緩和するための薬物の処方が増加し、ポリファーマシー(多剤服用)になりやすい傾向がある。室内はポリファーマシーが患者さんに及ぼす影響は甚大であると捉え、自分自身の長期的な目標として取り組みを始めた。

まずは、薬剤総合評価調整加算(ポリファーマシーに対する薬剤師の介入:150点)及び、薬剤調整加算(退院時まで2剤以上の減薬に繋がった場合:250点)の算定件数向上を目指した。当院に入院する患者は高齢者が多く基礎疾患に対して様々な病院から薬が処方されているケースも少なくない。

室内は自身の知識を活かし医師に対して薬効が重複している薬剤の情報提供や、検査値などの結果をふまえ漫然と継続している薬剤の必要性についても意見を行ってきた。薬局内の環境にも目を向け、少しでも患者さんの服用する薬剤数を削減できるよう配合錠の提案を行い採用薬の組み換えも実施してきた。

結果、取り組みを始めた当初から徐々に算定件数を増やし、2022年度の1年間においては「薬剤総合評価調整加算/薬剤調整加算=84件/14件」と大きく増加している。

一連の取り組みを行うことで当院の医師もポリファーマシーへの意識が変わり薬剤師の意見にも耳を傾けてくれるようになったと感じている。花川病院はポリファーマシーに対してチームで取り組めるような風土が根付いてきたと強く感じている。